

朝 日 大 山 遺 跡

都市計画公園朝日山公園整備事業に伴う

試掘調査概要

2002年3月

氷見市教育委員会

朝 日 大 山 遺 跡

都市計画公園朝日山公園整備事業に伴う

試掘調査概要

2002年3月

水見市教育委員会

目 次

第1章：調査に至る経緯と経過	1
第2章：遺跡の環境	2
第1節：遺跡の地理的環境	2
第2節：遺跡の歴史的環境	2
第3章：調査の成果	4
第1節：調査の概要	4
第2節：遺 物	6
第4章：ま と め	8
参考文献	8
報告書抄録	

図 目 次

第1図 朝日大山遺跡と周辺の遺跡	1
第2図 朝日山周辺図	3
第3図 試掘調査対象地区平面図	5
第4図 遺物実測図	7

図 版

1 遺跡周辺航空写真
2 遺跡遠景
A 地点 遺構検出状況
C 地点 遺物包含層
3 D 地点 版築
E 地点 遺構検出状況
調査風景
4 遺物写真

例 言

- 1 本書は、富山県氷見市幸町に所在する朝日大山遺跡の試掘調査報告書である。
- 2 調査は、都市計画公園朝日山公園整備事業による公園整備工事に先立ち、氷見市都市開発課の依頼を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、文化係長坂本研資・主任学芸員大野究・学芸員廣瀬直樹が調査事務を担当し、課長森静治が統括した。
- 4 調査及び本書の執筆・編集は廣瀬が担当した。
- 5 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習課が保管している。
- 6 調査参加者は次のとおりである。
 発掘作業：沢井正雄・沢井とき・中村かず子・坂田かずい・戸田敏子・向春子（以上、氷見市シルバー人材センター）
 整理作業：三矢恵京・日南静
- 7 調査にあたっては、以下の方々のご協力をいただいた。記して謝意を表します（敬称略）。
 高橋浩二 氷見市都市開発課

第1章 調査に至る経緯と経過

水見市都市開発課より幸町地内朝日山丘陵において都市計画公園朝日山公園整備事業の計画があることが知られ、計画地内における埋蔵文化財の有無について照会があった。

計画予定地は先だっての急傾斜地崩壊防止工事で削平された朝日山城跡に隣接するため、水見市教育委員会では事業地内における埋蔵文化財の状況を確認するための試掘調査を実施することになった。

試掘調査は平成13年12月10日から25日まで、延べ8日間行った。計画予定地の面積は1,903m²であるが、そのうち水見高校グラウンドとして大きく削平されている箇所を除いた東側を試掘調査の対象とした。この地区に任意に約1m四方の試掘坑を計57箇所設定し、人力により発掘を行い、遺構・遺物の有無を確認した。発掘面積は約60m²である。

調査の結果、調査対象地の東側の丘陵上部から谷にかけて弥生時代終末期の遺構及び遺物包含層が残存していることが確認されたため、この遺跡を新たに朝日大山遺跡として扱うこととした。



第1図 朝日大山遺跡と周辺の遺跡 (S = 1/10,000)

1. 朝日大山遺跡
2. 朝日山城跡
3. 七軒町遺跡
4. 朝日寺山古墳群
5. 朝日長山古墳
6. 朝日谷内横穴
7. 上日寺境内推定範囲
8. 朝日水源地遺跡
9. 運乗寺中世墓群
10. 朝日橋詰遺跡
11. 御座町遺跡
12. 伊勢玉神社中世墓群
13. 岩上遺跡
14. 朝日貝塚
15. 朝日瀬山古墳群
16. 鞍川B中世墓
17. 鞍川諏訪社遺跡

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230m²、人口は約5万8千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300～500mの丘陵に取り囲まれ、東側約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。

朝日大山遺跡は、市街地の西に接した朝日山丘陵の通称大山の東側にのびる丘陵上に所在する。朝日山丘陵は12～13万年前の下末吉海進期に形成された中位段丘である。標高は85～90メートル前後であり、宝達丘陵から富山湾に向けて東に延び、氷見市街地に接してとぎれている。大山は、朝日山丘陵の西北端にある山塊で、現在は削平され氷見高校のグラウンドとして利用されている。

遺跡の標高は約27～30m、平野との比高は約25mであり、現在は山林・畠地として利用されている。

第2節 遺跡の歴史的環境

ここでは、朝日谷内以北の朝日山と、その周辺の様子について触ることにする。

朝日山丘陵北方の平野に位置する七軒町遺跡では、縄文時代晚期の遺物が採集されているが、詳細は不明である。

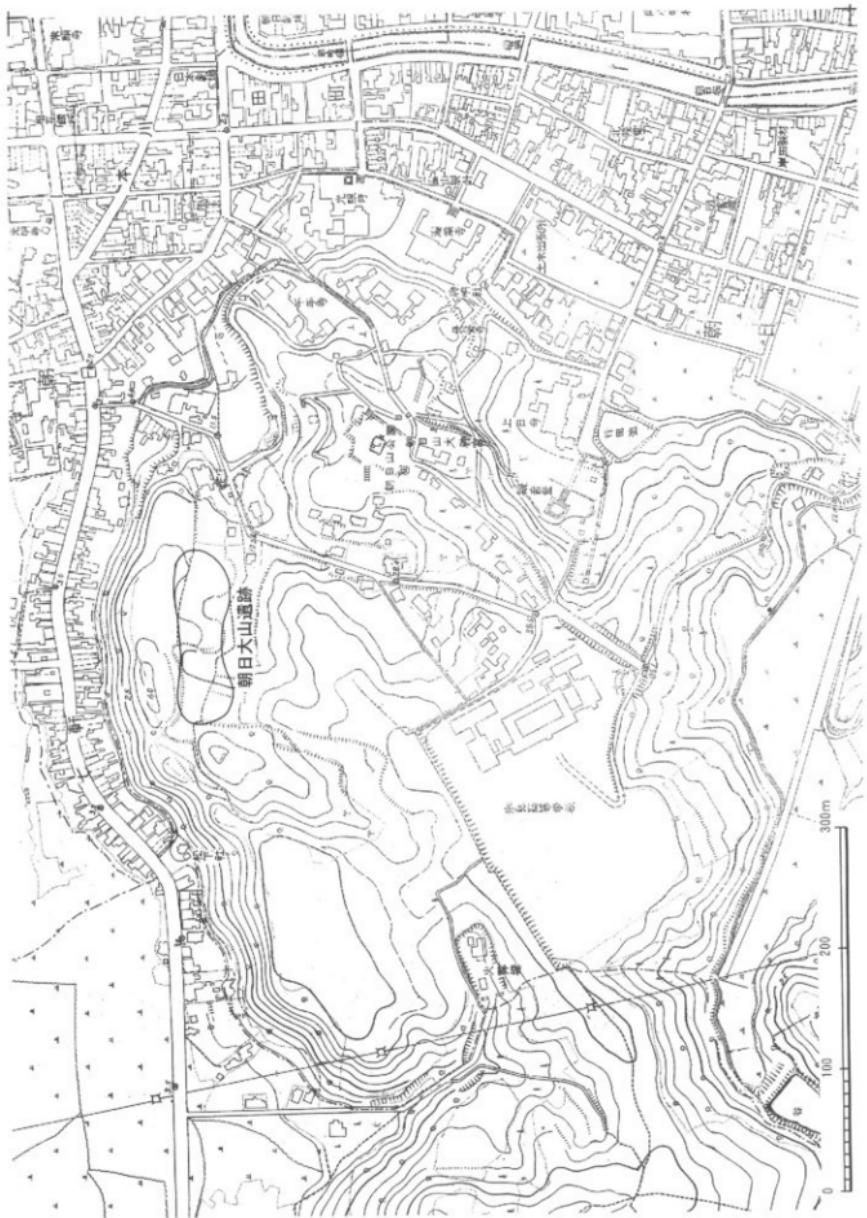
弥生時代の遺跡としては、丘陵樅から平野部にかけて所在する岩上遺跡・朝日貝塚で弥生時代の遺物が採集されているが、遺構は未確認であり、詳細は不明である。

古墳時代には、朝日潟山古墳群・朝日寺山古墳群・朝日長山古墳・朝日谷内横穴が所在する。このうち朝日長山古墳は、宅地造成によって消滅したが、6世紀前葉の前方後円墳であることが発掘調査などにより判明している。一方、近年確認された朝日寺山古墳群は円墳2基からなり、その立地から朝日長山古墳に先行する中期古墳の可能性が指摘されている。

朝日山東斜面一帯には、現在いくつかの寺院が並んでいるが、このうち朝日山上日寺は白鳳10年開基の寺伝をもつ真言宗の古刹である。上日寺では、15世紀をピークに中世全般の石造物・土器が確認されており、境内の範囲も現状よりさらに広く、第1図に示した範囲が想定されている。金橋山千手寺は、同じく白鳳10年の開基の寺伝を持つ真言宗寺院であるが、氷見郡法谷村（現高岡市）から現在地に移ったという伝承もあり、詳細は不明である。また、日蓮宗蓮乗寺は弘化元年（1844）に、浄土真宗光熙寺は安永9年（1780）に現在地に移ったという。

朝日山城跡は、朝日大山遺跡の北側に所在する。古くから堀切があることが知られていたが、その他の防御施設については不明である。平成8年から平成9年にかけて急傾斜地崩壊防止工事に伴う発掘調査を実施し、調査終了後、堀切を含め從来朝日山城跡として登録されていた埋蔵文化財包蔵地のほとんどが削平された。調査では若干の中世の遺物が出土している。

また丘陵上では、明治41年に現在の朝日山公園が開園し、大正15年には氷見町の火葬場が、さらに昭和3～6年にかけて県立氷見中学校（現県立氷見高校）の校舎・グラウンドが建設され、一部宅地化も進行した。



第2図 朝日山周辺図 ($S = 1/4,000$ ・昭和28年測量)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要（第3図、図版2・3）

試掘調査の対象地区は、朝日山丘陵に東西方向にのびる尾根の南側斜面から谷にかけてで、現在は竹林・畑地・荒蕪地として利用されている。大部分は戦前から戦後に畠地として開かれていたと考えられ、斜面から谷底が整地・造成されている。尾根上には朝日山城跡の遺構である堀切が所在していたが、尾根北側斜面とともに、急傾斜地崩壊防止工事すでに削平されている。調査対象地の大部分が竹林であり一部では現在も畠作を行っているため、調査にはかなりの制約があったが、計57箇所に約1m四方の試掘坑を設定して調査を行った。

調査の結果、朝日山城跡に関連する遺構を確認することはできなかったが、3箇所で弥生時代終末期と考えられる遺構及び遺物包含層が残存していることを確認した。そのうち、A地点では土坑を検出した（図版2）。土坑は大型で、今回の調査では部分的な検出のみで全体形を把握することはできなかつたが、南北3m以上、東西4m以上の規模を持ち、堅穴住居あるいは溝の可能性も想定される。土坑内からは多数の弥生土器片が出土した。

B地点・C地点では遺物包含層を確認した。包含層からは弥生土器片が集中して出土したが、いずれの地点も遺構は確認していない。B地点の包含層は黒色砂質土と褐色砂質土の2層（10～40cm）であるが、比較的狭い範囲で確認しており、後世の擾乱・削平を受けていると考えられる。C地点では黒色砂質土の包含層（15～30cm）を確認した。

谷は主に埋め立てによって畠地を整地しているようで、厚いところで1m以上の盛土を確認した。盛土中からは近世～近現代の陶磁器類が出土している。

また調査対象地のほぼ中央、朝日山城の堀切南側に深い窪地があるが、窪地の西側には谷をふさぐようすに南北方向の長さ約28.5m、幅約12.5mの長方形の区画が存在する（D地点）。調査の結果、区画の南側で約80cmの表土の下に1m以上の厚さにわたる黒色土と黄色土による版築構造を確認した。窪地はため池であった可能性があり、その場合長方形区画は堤として築造されたと考えられる。遺物は出土しておらず、築造の時期など詳細は不明である。区画北側は、他の地区的近現代以降の整地盛土と同様の土層で、版築構造は確認できない。もともと北側には堤がのびていなかったのか、いったん堤北側が破壊された後、畠地の整地に伴って区画が復元されたのか、どちらかであろう。

長方形区画東側のE地点では方形の土坑を検出した（図版3）。遺構検出面から土器片が出土したが細片であり、詳細は不明である。

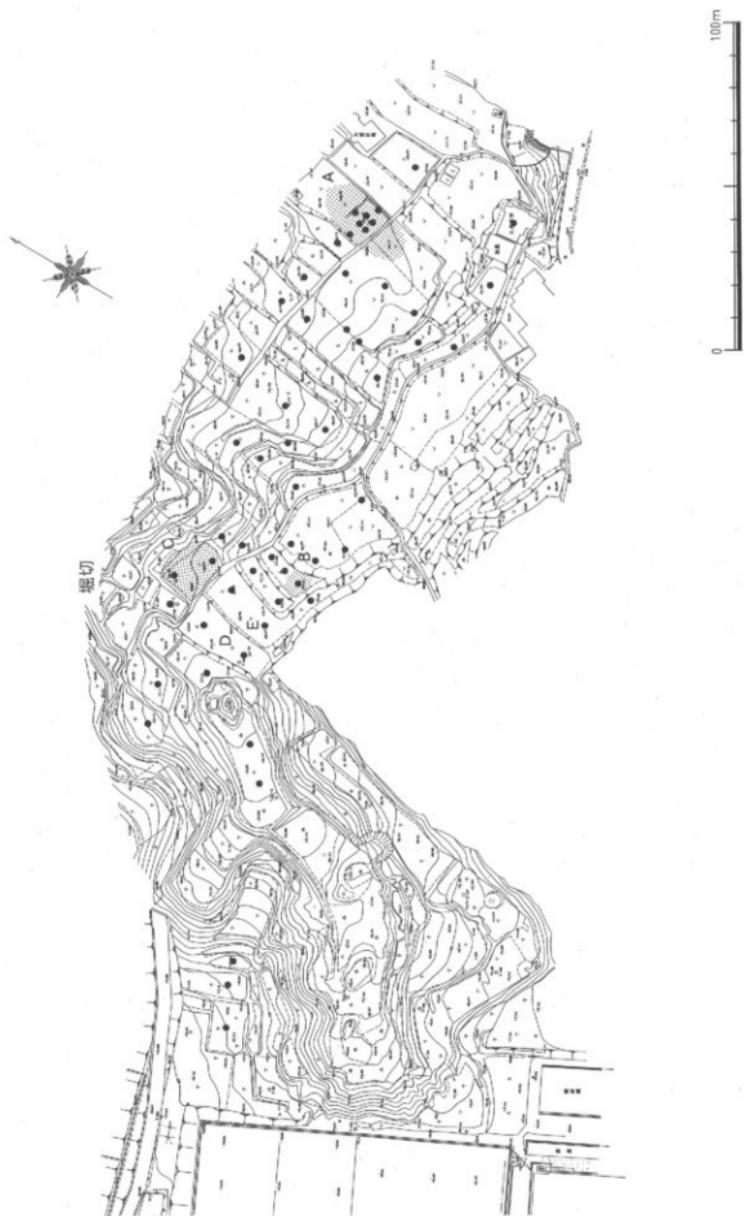
第2節 遺物（第4図、図版4）

今回の調査では弥生土器・珠洲焼・近世～近現代陶磁器類・石器などが出土した。破片数はそれぞれ、弥生土器が480破片、珠洲焼が1破片、近世～近現代陶磁器類が96破片、磨製石斧が1点である。弥生土器のほとんどは遺構や包含層に伴って出土している。

A地点（第4図-1～15）

A地点では264破片の弥生土器が出土したが、そのうち15点を図示した。

第3図 試験調査対象地区平面図 ($S = 1/1,500$ • ● : 試験坑)



1は壺の口縁部である。有段口縁で、口径は13.0cmを測る。口縁はゆるやかに外反する。表面調整は不明瞭である。

2は壺ないし壺の口縁部である。有段口縁で、口径は14.2cmを測る。摩滅が著しいが、口縁部外面にヨコハケを施す。

3は壺の口縁部である。有段口縁で、口径は19.6cmを測る。口縁はゆるやかに外反する。摩滅が著しいが口縁部外面に擬凹線文を施す。

4は台付壺の脚部である。内面は指頭圧痕、外面は突帯を貼り付けヨコナデを施し、突帯に擬凹線文を施す。外面に赤彩が残る。

5は台付壺の脚部か。脚端部径は6.9cmを測る。「ハ」の字状に開き、端部はゆるく外反する。摩滅が著しく表面調整は不明である。

6は蓋の口縁部である。口径は14.0cmを測る。薄手の精緻なつくりである。内外面とも表面調整は不明瞭である。赤彩は施さないが、にぶい橙色を呈する。

7は器台ないし高杯の口縁部である。口径は22.4cmを測る。口縁端部は丸くおさめる。表面調整は不明瞭ながらミガキを施すようである。内外面に赤彩を施す。

8は器台ないし高杯である。表面調整は不明瞭ながらミガキを施すようである。外面に赤彩を施す。内面に炭化物が付着する。

9は高杯の脚部である。ラッパ状に開き、端部はつまみ出して面を取る。脚端部径は10.6cmを測る。摩滅が著しく、表面調整は不明である。

10は器台ないし高杯の脚端部か。端部はつまみ出し、ヨコナデを施す。端部径は9.0cmを測る。内外面に赤彩を施す。表面調整は不明瞭ながらミガキを施すようである。精緻なつくりである。

11は器台ないし高杯の脚端部である。脚端部が大きく開く器形で、端部は面を取り、径は19.8cmを測る。摩滅が著しく表面調整は不明である。2箇所に穴が穿たれるが、これが対になるものかどうかは不明である。端部内外面に炭化物が付着する。

12~15は壺ないし壺の底部である。12は底径4.8cmを測る。表面調整は不明瞭である。13は底径5.7cmを測る。底部は薄く、体部外面にハケ調整を施す。14は底径4.0cmを測る。内面に炭化物が付着する。表面調整は不明瞭ながら内外面ともにハケメを施すようである。15は底径8.4cmを測る。内面に炭化物が付着する。表面調整は不明瞭である。

B地点（第4図-16・17）

B地点では149破片の弥生土器が出土したが、そのうち2点を図示した。

16は小型の丸底壺か。口縁部は横円を描き、長径で8.4cmを測る。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面は、上部が指頭圧痕、下部がナデを施す。

17は壺の口縁部である。「く」の字状口縁で、口径は16.4cmを測る。端部は厚みがあり、丸くおさめる。摩滅が著しく表面調整は不明瞭であるが、外面にはヨコナデを施す。

C地点（第4図-18）

C地点では60破片の弥生土器が出土したが、そのうち1点を図示した。

18は壺の口縁部か。口径は15.2cmを測る。口縁端部は厚みを持ち外反する。摩滅が著しく表面調整は

不明瞭であるが、外面にはヨコナデを施す。

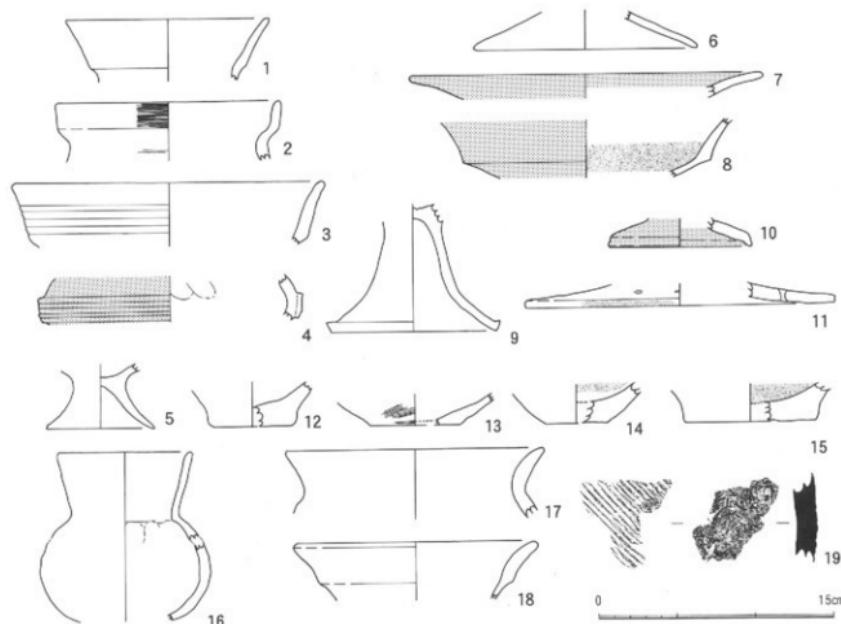
その他の遺物（第4図-19、図版4-①）

19は珠洲焼壺ないし壺の体部破片である。旧耕作土中から近世の陶磁器類と共に出土したが、当地が中世に土地利用されていたことを示すものと考えたい。

①は磨製石斧の刃先片である。整地盛土中から近世～近現代の陶磁器類と共に出土した。残存長3.3cm、残存幅5.2cm、残存厚1.8cmを図る。

出土した弥生土器は細片がほとんどで全体形をうかがえる資料は少ないが、ある程度の時期差を持ちつつも、おおむね弥生終末期の月影式期に属すると考えられる。

なお土器に関しては、富山大学助教授の高橋浩二氏からご教授を得た。記して感謝したい。



第4図 遺物実測図 (S=1/3)

第4章 ま と め

試掘調査の結果、不十分ながらある程度の知見を得たので、まとめておきたい。

- 朝日大山遺跡は、氷見市幸町、朝日山丘陵の通称大山の東側にのびる丘陵上に所在する。標高は約27~30mである。
- 調査対象地内の3箇所で、弥生時代終末期の遺構ないし遺物包含層を確認した。戦前から戦後にかけての整地により擾乱・削平を受け分断されているが、一連の集落の存在が想定される。
- 調査では弥生土器が480破片出土した。細片がほとんどで全体形をうかがうことができるものは少ないものの、おおむね弥生終末期の月影式期に属すと考えられる。
- 今回の調査では、朝日山城に関連する遺構は確認できなかったが、珠洲焼が1破片出土しており、当地が中世に土地利用されていたことを示すものだと考えた。
- 氷見市内の弥生時代の集落は、法仏式期までは渴に面した砂丘上に営まれていたが（柳田遺跡）、月影式期にかけて丘陵上へ移動することが知られている（小久米A遺跡・阿尾城跡下層・柳田布尾山古墳下層）。朝日大山遺跡も、これら弥生終末期における集落の変化の中で、丘陵上に営まれた遺跡であると考えられる。本遺跡の詳細については今後の調査による資料の増加を待ちたい。

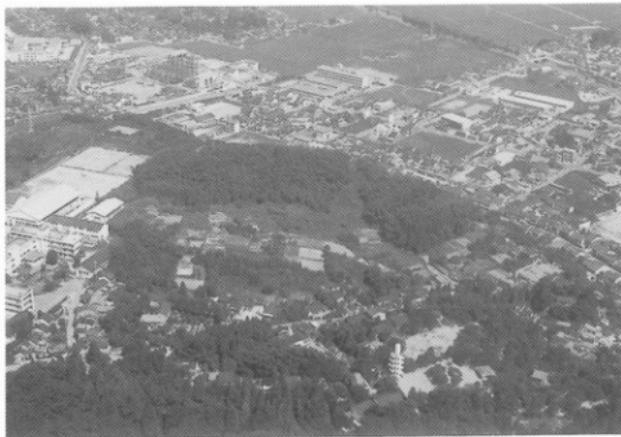
参 考 文 献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1995 『谷内・杉谷遺跡群』
- 上市町教育委員会 1984 『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町木製品・総括編』
- 上市町教育委員会 1998 『砂林開北遺跡発掘調査標報』
- 児島 清文 1962 『氷見市地名考』 氷見報知新聞社
- 富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1992 『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(2)』
- －布目沢北遺跡第3次調査－ 大門町埋蔵文化財調査報告第8集
- 富山県立氷見高等学校歴史クラブ 1958 『柳田遺跡調査報告書』
- 富山県立氷見高等学校歴史クラブ 1964 『富山県氷見地方考古学遺跡と遺物』
- 富山考古学会 1999 『富山平野の出現期古墳』
- 氷見市教育委員会 1984 『小久米古墳群・小久米A遺跡試掘調査報告書』
- 氷見市教育委員会 1985 『小久米A遺跡発掘調査報告書』
- 氷見市教育委員会 1998 『朝日山城跡』 一七軒町地区急傾斜地崩壊防止工事に先立つ発掘調査－
- 氷見市埋蔵文化財調査報告第26冊
- 氷見市教育委員会 2000 『柳田布尾山古墳』－第1次・第2次発掘調査の成果－ 氷見市埋蔵文化財調査報告第29冊
- 氷見市教育委員会 2001 『柳田布尾山古墳』－第3次発掘調査の成果－ 氷見市埋蔵文化財調査報告第33冊
- 氷見市教育委員会・富山大学考古学研究室 2000 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅶ』 1999年度
- 氷見市埋蔵文化財調査報告第28冊

図 版



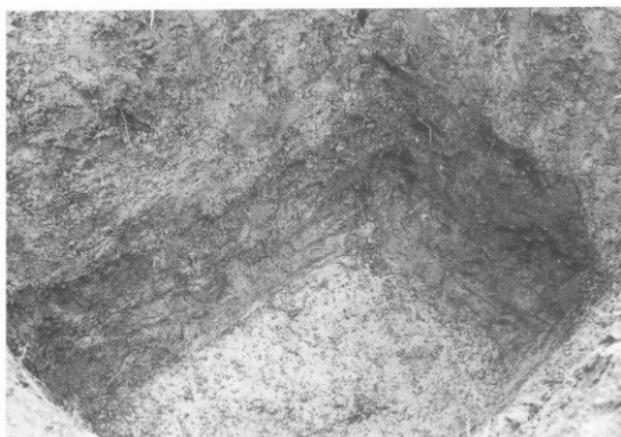
遺跡周辺航空写真（1952年 撮影）



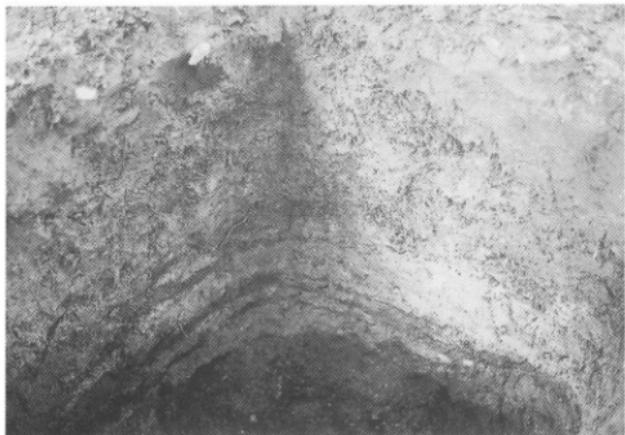
遺跡遠景
(南東から・1978年撮影)

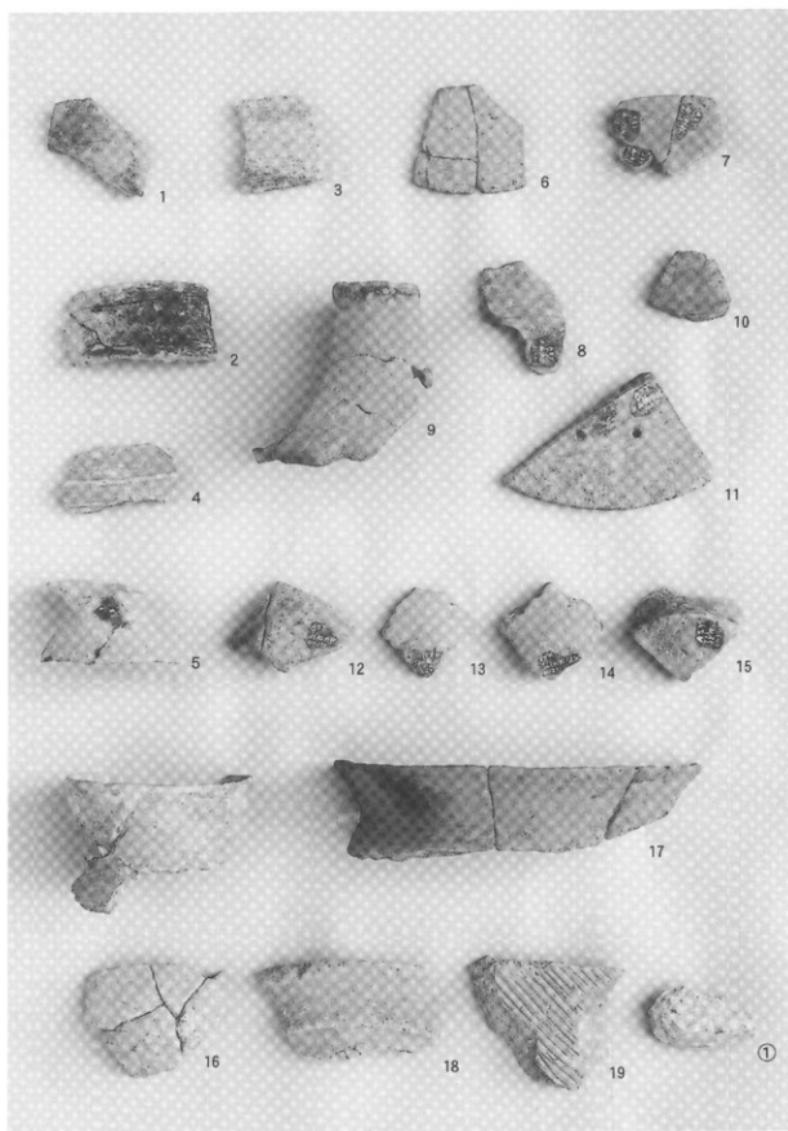


A地点 遺構検出状況
(南東から)



C地点 遺物包含層
(南東から)





遺物写真

報告書抄録

ふりがな	あさひおおやまいせき							
書名	朝日大山遺跡							
副書名	都市計画公園朝日山公園整備事業に伴う試掘調査概要							
卷次								
シリーズ号	水見市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第36冊							
編著者名	廣瀬直樹							
編集機関	水見市教育委員会							
所在地	〒935-0016 富山県水見市本町4番9号 TEL0766(74)8215							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	′			
朝日大山 遺跡	富山県水見市 幸町	16205	361	36° 51' 10"	136° 59' 05"	2001.12.10 2001.12.25	1,903	公園整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
朝日大山 遺跡	散布地	弥生時代 終末期	土坑	弥生土器 珠洲焼 陶磁器類				

平成14年3月25日 印刷

平成14年3月31日 発行

朝日大山遺跡

水見市埋蔵文化財調査報告書第36冊

編集・発行 水見市教育委員会
 〒935-0016
 富山県水見市本町4番9号
 ☎0766(74)8215

印刷 有限会社 ひふみ印刷社